



シャボン玉飛んだ：有名な唱歌『シャボン玉』。のどかな歌に聞こえますが、作詞家の野口雨情が幼くして死んだ娘を想って書いた作品だそうです。

「屋根まで飛んで、壊れて消えた：なぜか今、この歌を口ずさんでしまいます。太陽のような明るさと春風のような優しさを持つあの人が突然、シャボン玉のようにはじけて消えてしまいました。大切な人がシャボン玉にならないように皆さま、くれぐれもご用心ください」。俳優の大和田獏さんが、親しい方に送ったメッセージです。

大和田さんとおしどり夫婦で知られた女優の岡江久美子さんが、4月23日に、新型コロナウイルスによって都内の病院で亡くなりました。また63歳の若さでした。

153 女優 岡江久美子



私と同年代。美人で天真爛漫な岡江さんのファンでもあったため、この訃報には、ことさらに衝撃を受けました。御自宅の前で岡江さんの遺骨を受け取り、報道陣に頭を下げた大和田さんの姿にも、涙が止まりませんでした。

長尾和宏（ながおかずひろ）医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

のようになくなってしまふ。新型コロナウイルスが、人の終末期の在り方を、突如大きく変えてしまっていました。テレビなどの報道で、岡江さんの病状の経緯はご存じだと思ふのでここでは振り返りませぬ。

しかし、24時間365日、いつでもすぐに電話ができる「かかりつけ医」を持っていたら、自宅で重症化することはなかったのでは？ もっと早期にできる治療があったのでは？ タラレバですが、一町医者として悔しくてなりません。志村けんさんの訃報の際も、同じ悔しさを覚えました。

大病院の主治医とは別に近所でもかかりつけ医を持つことは、制度上問題なし。私も、通院でがん治療中の多くの在宅患者さんを、日々サポートしています。

悲劇減らすためGWは「ステイホーム」

ちょっととした体調の変化から、治療への不安や疑問など、どんな悩みも引き受けるのがかかりつけ医の役割。岡江さんは、昨年末に初期の乳がん手術をし、1月末から2月半ばまで放射線治療を受けていたとのこと。体力と免疫力が落ちていたことは間違いありませんが、それと新型コロナウイルス重症化との関連性は、誰も証明ができません。

今、がん治療中の人は、悩ましい日々が続くと思いますが、自己判断で治療をやめることだけはしないようにお願いします。そして、がん闘病中の人がけでなく、元気な人にも岡江さんの死を重く受け止めてもらいたいと思います。

あなたが陽性ではないという保証はどこにもありません。そしてあなたが、どこかでがん患者さんに感染させていたとしたら？ 悲劇を一つでも減らすため、GWは「ステイホーム」をお願いします。